今日のイラスト 288　「 イラストでたどる萩往還④　大屋の刑場跡 」　　古谷眞之助

イラストでたどる萩往還 04　大屋の刑場跡

文・イラスト＝古谷眞之助

長州藩の牢獄に野山獄、岩倉獄があったように、萩藩では刑場までが武士階級のものと、それ以外の庶民のものとに明確に区別されていた。後者のそれが大屋の刑場である。

1759（宝暦9）年6月、ここで我が国初の女体の解剖が行われた。我が国初の解剖を行った山脇東洋の弟子で萩藩医・栗山孝庵が取り仕切り、解剖されたのは川上村の農民・久右衛門の妻〔美濃〕（17歳）だった。萩藩士・榎本源之進と恋仲だった彼女は嫌々嫁がされたためその後も彼と密通を続け、ついに磔刑の処分が下る。それを知った孝庵は、内臓を傷つけぬように磔を斬首に変更する嘆願書を提出し、理想的な形で遺体を解剖したのである。

今からもう 10 年近く前、萩往還ガイドの新人研修の際に、日本で初めて女体の解剖をした医師が萩藩にいたことを知った。解剖と言えば前野良沢、杉田玄白の「解体新書」を思い浮かべる程度だったからびっくりした。その後少し勉強して、解剖されたのが近隣の農家の嫁・お美濃であることを知り、しかも彼女が処刑されたのは旦那の、言わば DV に耐えかねてのことだったと知って「さもありなん」と幾分か同情し、ガイドの際にはそのように解説もしていた。ところがこれにはさらに裏があった。その後、お美濃処刑の裏には「悲恋」が絡んでいたと、ガイド仲間からある本の紹介を受けた。悲恋の出所を出版社に問い合わせたところ、「山口県文書館の史料」と言われて、これはいよいよ本格的に調べねばならないと思ったのである。

そこで文書館と図書館で本格的に資料を漁ることになった。文書館には萩藩の裁判記録「諸士御仕置帳」が残っていて、事件のことが詳しく記録されている。それによれば、「もともと萩藩士と恋仲だった美濃は親の都合で不本意な結婚をさせられる。しかし、結婚後も美濃は大胆にも密通を続け、それに感づいた夫・久右衛門が火吹き筒で咎めると、美濃は鉈の背で夫を殴りつけ、彼は一時人事不詳に陥った。結婚後も美濃は無断外泊をし、あまつさえ藩士榎本源之進を家に引き込むことさえした」と言うのが事の真相なのである。現在であれば面白くもない不倫事件と傷害罪で終わるのだろうが、夫に対する傷害罪に加えて不義密通である。男尊女卑の当時の法では女は死罪である。そうして美濃には磔の刑が下り、女体解剖のチャンスをうかがっていた藩医・栗山孝庵はその情報を得て藩に嘆願し、結局医学史に名を残すのである。このような経緯を知ると、とても「悲恋物語」とは言えなくなる。身分差があるので叶わぬ恋と言えなくもないが、美濃が結婚する前に二人して駆け落ちする道もあったのではないか。そもそも、相手方の榎本源之進が如何にも潔くない。結婚後も、こそこそと会いに出かけており、そのことだけでも「悲恋」には相応しくない。当の源之進はこの事件の後、廃嫡されたようだ。それを匂わす記述が仕置帖には残っている。ともあれ、語り部としては、この調査以前にガイドしたお客様には不十分な解説をしたわけで、誠に申し訳ないと思っている。生半可な知識を披歴するくらいなら、むしろ語らぬことこそが正解と自戒した次第。なお、この一連の顛末を扱った作品に古川薫の「女体蔵志」がある。（2019.7.24 記 ）